



KANSAI
UNIVERSITY

教職支援センター年報

2023

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2023』 目次

投稿原稿

<報告>

学習指導要領改訂時期における大学教職課程「地理歴史科教育法(二)」での
実践研究ノート ～ おもに模擬授業指導案の作成過程での指導法の改善

関西大学非常勤講師 柴田 洋一…………… 1

国語教室の実践的課題集

関西大学非常勤講師 榎井 英人…………… 12

1. 教員の養成の目標

関西大学教職支援センターの基本理念…………… 22

2. 教員の養成に係る組織

教員の養成に係る組織…………… 23

教職支援センター規程…………… 25

教職支援センター自己点検・評価委員会規程…………… 29

3. 教員の養成に係る授業科目

教職に関する専門教育科目担任者一覧…………… 31

4. 教員免許状の取得の状況

各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科…………… 36

学部別介護等体験 参加者数…………… 38

学部別中学校・高等学校教育実習生数…………… 39

教員免許状取得者状況(学部・大学院)…………… 40

教員免許取得までの諸手続き…………… 47

5. 教員への就職の状況

【校種別】公立・私立教員採用試験合格者数…………… 48

【学部・研究科別】公立教員採用試験合格者数…………… 49

教員採用選考に係る「大学推薦」の応募・可否結果…………… 50

6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組

「介護等体験事前指導」について…………… 51

「①教育実習事前指導登録ガイダンス」について…………… 52

「③教育実習事前指導履修者対象ガイダンス」について…………… 54

「⑤教職実践演習（中等）履修者対象教職課程・教員養成フォーラム」	
について	56
教員採用試験合格者との情報交換会について	58
教職課題研究会について	60
教員採用内定者との懇談会	61
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	62
教員採用試験 面接対策セミナー実施状況	63
教職ガイダンス日程	64
 7. その他	
関西大学教職支援センター年報投稿規程・執筆要領	65

<報告>

学習指導要領改訂時期における大学教職課程「地理歴史科教育法(二)」での 実践研究ノート ～ おもに模擬授業指導案の作成過程での指導法の改善

関西大学非常勤講師 柴田 洋一

1 研究目的

2018(平成 30)年の高等学校学習指導要領の改訂時期において、地理歴史科教育法(二)の講義における指導法について 6 年間の実践を振り返り、おもに模擬授業指導案の作成に関する改善を研究する。

2 問題意識

2-1 この講義での状況

地理歴史科教育法(二)の講義での修得目標は、講義のシラバスにも示されているように、指導法における初歩である。守破離という守の段階。従って、学生の自分勝手な目標設定や展開ではなく、学習指導要領にもとづき、講師の指導に従って、指導案が作成でき、模擬授業で目標に適した展開として ICT 機器を活用して円滑に行い、授業後に学生相互の意見交換を通して改善できるスキルの修得をめざす。

ところが、高校現場のプロの教師でさえ混乱が生じていた状況によく似た様子が、本学の地理歴史科教育法(二)の講義でも見られた。縁あって、2018(平成 30)年度から、本学で地理歴史科教育法(二)を担当して 6 年間、苦戦する学生が年々増えたように感じた。とくに、指導案作成の段階において学生がフリーズをおこしていた。

入学した学生たちは、模擬試験の偏差値で判断すると、数値は微増している。つまり、以前に比べて、一般入試では偏差値的に高い学生が入学しているはずである。しかし、これに反して、指導案作成では思考停止に陥る傾向が強くなっている。一体なぜだろうか。教職課程やこの講義を選択する学生の質が低下しているのだろうか。

ともあれ、この変化に伴い、この講義での学力を担保するために、筆者には、学生からの指導案を添削・指導する作業量が年々増加した。毎週のように、土曜講義後に居残って、もしくは持ち帰って月曜早朝にかけて、かなりの箇所に赤ペンで訂正を入れた。

2-2 高校現場の状況

筆者は 40 年間、高校現場で授業を担当してきた。この数年間の状況を振り返ると、2020(令和 2)年 2 月から始まったコロナ禍の影響で、出席停止手続きの数の多さ、授業での手指や机椅子の消毒、体温測定報告書の配布・回収に多くの労力が割かれた。並行して、学びを止めない取り組みとして、オンラインでの遠隔授業や分散登校や昼食・学校行事等の実施に向けた校内体制構築において、教員内では不安と対応に格差が拡大した。

そしてコロナ禍が収束しない中で迎えた 2022(令和 4)年 4 月の新学習指導要領の本格実施に、大阪市内立高校 20 校すべてで大阪府への移管作業が重なった。このような年度初めに、現場の

高校では、教科会にて若手・中堅教員のほとんどが思考停止に陥った。とくに3観点評価への対応について苦戦した。筆者自身も、学生であった1982(昭和57)年度改訂での現代社会や、中堅教員となった2003(平成15)年度改訂の日本史A・世界史Aとは、質の違った変化を感じた。

さて、筆者は今回の2018(平成30)年の学習指導要領改訂のタイミングで、2019(平成31、令和元)～2020(令和2)年度の2年間に大阪教育大学連合教職大学院(教職修士課程)において、教育スキルをブラッシュアップしていた。そこで、本務校と夜間大学院と大学の非常勤講師の掛け持ちで得た経験を活かして、その後の対応・進化をスムーズに行えるように注力した。

4月当初、本務校の教科会で、3観点評価と新科目の授業展開について、先行研究校での情報を提供した。そして、前期授業での目通しを立てる提案を行い、中堅・若手教員と共有した。その後は授業担当者間で進捗状況の情報交換を通しての経過観察、定期考査後の振り返りと修正・改善等の情報共有の仕組みづくりという、一連のPDCAと実際の授業でのOODAループをまわしての改善に取り組んだ。

その後、同僚もレジリエンスを発揮して円滑な移行に至った。年度末には、教科会で若手から、次年度に改良すべき課題も提案された。きっかけは、多くの教員が感じた、指導と評価の一体化に関する若干の違和感であった。

課題はおもに3つであった。

課題1 生徒の記述内容の量と質と、評価の一体化の見直し

評価基準を分量の多さで4段階として1年間実施した。しかし、文字数がたくさんでも、語句の量が少なかったり、因果関係が薄かったりして、教員には質的に満足できない状況への改善

課題2 振り返りシートの活用見直し

記述内容の質的向上をめざした改善

課題3 小テストの実施時期の見直し

効果の高いタイミングは各授業末か、小単元末か。一方、教科書会社作成の授業スライドで設けられているタイミングは、小単元中に3回であった。

とくに、見直しが進む状況変化も見られた。2022(令和4)年度では、まだ新型コロナ対策の健康観察表の作成と振り返りシートの活用が重なって、授業始まりと終わりに煩雑さが集中したのに対して、2023(令和5)年度には、健康観察表は感染状況の改善から行わなくなり、授業での指導と振り返りシートの活用法について、教員の意識が集中し始めたからと考えられた。筆者は、この出来事を通じて指導と評価の一体化について、確実に若手にも浸透し続けていると分かった。

3 困難さの増加原因

3-1 過渡期でのアンビバレントな学び

現場の教師と教職課程の学生の困難さは、共通した原因から生じると考えられた。

一般的に、学習指導要領改訂の過渡期での学びでは、下にしめすように新旧両方の2種類の複雑さに直面する。1989(平成元)年度の第3の教育改革からの怒涛のような改革の荒波を何度も経験した教師なら、いままでの経験を駆使することで大して困らないが、経験が少なければ困難を感じる場面である。

複雑さ1 新旧両方の学習指導要領の比較・読解

複雑さ 2 新旧両方から教科書を比較・選択して指導案の作成

講義において、教科書別に学生の選んだ指導案をまとめると以下のようになった。この講義では、模擬授業指導案とアクティブ・ラーニング指導案を作成させている。

表 1 模擬授業指導案 教科書別作成本数

	2018	2019	2020	2021	2022	2023		
	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5	小計	日世歴計
詳説日本史B309	6	6	5	12	11		40	49
日本史探究705						9	9	
詳説世界史B310	3	6	6	2	4		21	23
世界史探究704						2	2	
歴史総合707					3	6	9	9
合計	9	12	11	14	18	17	81	81

表 2 模擬授業指導案 時代区分別作成本数

	原始・古代	中世	近世	近代	現代	合計
詳説日本史B309	11	6	9	13	1	40
日本史探究705	4	2	1	2	0	9
詳説世界史B310	6	4	7		4	21
世界史探究704	1	0	1		0	2
歴史総合707			6		3	9
合計	22	12	39		8	81

表 3 アクティブ・ラーニング指導案 教科書別作成本数

	2018	2019	2020	2021	2022	2023		
	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5	小計	日世歴計
詳説日本史B309	4	6	4	8	7		29	42
日本史探究705						13	13	
詳説世界史B310	4	4	4	2	4		18	20
世界史探究704						2	2	
歴史総合707					2	0	2	2
合計	8	10	8	10	13	15	64	64

表 4 アクティブ・ラーニング指導案 時代区分別作成本数

	原始・古代	中世	近世	近代	現代	合計
詳説日本史B309	6	8	5	8	2	29
日本史探究705	3	4	1	3	2	13
詳説世界史B310	4	5	6		3	18
世界史探究704	1	0	1		0	2
歴史総合707			1		1	2
合計	14	17	25		8	64

2022(令和 4)年度の新課程の本格実施からは、年次進行で旧課程から新課程への切り替えが行われた。詳しく見ると、2022(令和 4)年度には、歴史総合等の新科目が 1 年生、翌 2023(令和 5)年度には世界史探究・日本史探究等が 2 年生で実施されても、旧科目の日本史 A・B、世界史 A・B が残っていた。つまり、大学生の教育実習においても旧課程の教科書を使う機会が残されていた。そのため、筆者の講義では指導案作成に関して、昨年度 2022(令和 4)までは、内容は旧

課程の教科書で、評価は新課程の 3 観点でと、文部科学省からの指示通り、移行措置に合わせて指導案を作成させていた。

この状況において、学生の課題は、評価の観点が 4 観点から 3 観点到変化したことへの対応を中心に気をつけて、自分が高校時代に受けた授業の教科書(実際には最新版を購入させている)と比較検討しながら指導案を書くこととなった。評価の観点が変わっただけでも、経験の少ない教師と学生は戸惑った。とくに学生にとっては、授業での立場が「受け身の高校生役」(User)から「作り出す教師役」(Maker)へ 180 度変わることにイメージがついていけず、思考停止に陥る場合が多かった。

3-2 改訂新科目独自の複雑さ

講義の学生を取り巻く状況が加速したのは、この 2023(令和 5)年度であった。学習指導要領改訂の過渡期は、年次進行で高校 3 年生まですべて新科目実施となる新年度の 2024(令和 6)年度で終了する。そのため、前年度にあたる今年度から、筆者は講義のシラバスで、指導案の使用教科書はすべて新課程で計画した。

このような使用教科書の変化に伴い、新科目を高校生として学んだ経験のない講義の学生は、新学習指導要領と新科目の教科書のすべての内容に必然的にどっぷり浸かることになった。

3-3 コロナ禍の影響による学生の意欲と行動力の収縮

少なからず影響したのは、2023(令和 5)年 5 月 8 日に学校でコロナ対応が解除されるまでの 3 年 3 カ月の間に、学生が経験したコロナ禍の生活様式であった。筆者がこの 6 年間、学生の様子を観察・比較して言えることは、年度によって出来が違うことである。

2018(平成 30)年度には、教職に向き合う姿勢や教員採用試験突破への意欲が強く感じられ、優秀な学生が多かった。2019(平成 31,令和元)年度には、部活動優先の意識が強い学生が多く入り込み、講義での内容修得より単位履修の意識が強く、全体のレベルが引き下げられた。

2020(令和 2)年度はコロナ禍初年で、マスクの着用の上、こわごわ出席していた学生が多くいたので、過去、時代の過渡期にひとはどのようにたちむかったのかについての教材 2 本を視聴させる(『教職支援センター年報2020』参照)とともに、こころのケアのワークショップを取り入れて、自己肯定感の向上につとめた。一方ではまだ、前年度までのように一部に優秀な学生が残っていた。

2021(令和 3)年度と 2022(令和 4)年度は教職へ向き合うには心構えが十分ではない学生が増え、指導案も模擬授業の出来映えも想定したレベルを超える学生は徐々に減少した。

とくに評価対象の提出物を仕上げるまでに至らずに提出できなかったり、提出自体を忘れたりするケアレスミスが目立った。その背景となる理由は、恐らくコロナ禍の影響で、最小限の生きる基本が危ぶまれた時代であったからと考えられた。この傾向についての男女差は、この段階では大きな差がないように思われた。

そして、2023(令和 5)年度は、先に述べたように、学びの質が前年度までと変わった。すなわち、指導案の作成において、新科目の教科書で 3 観点評価を駆使して作成することとなった。

いままでにも、指導案のテーマ決めや、書き方の基本から、お世話がかかる学生はいた。模擬授業の指導案を事前指導する段階で、単元目標を自分勝手に、授業展開や配布プリントも中途半端

のまま見せに来れば、まだよい方であった。例えば次のようなものも見られた。書籍や先輩の指導案からの転用、指定様式や出題意図と異なる指導案の提示、改訂前の旧課程 4 観点評価、年度が同じ講義で先に行った模擬授業の指導案の間違った記入の繰り返しの拡散(新科目名「日本史探究」の探究が探求と誤記)、指定の高校歴史科目名でない指導案の提出(中学校社会科、地理総合や公民科の指導案)。

しかし、困ったことに、今年度、ほとんど事前指導を受けずに模擬授業をした学生が複数現れた。講義直後にも居残らず、改善箇所について振り返りも十分にできなかった。

4 指導法の改善

筆者は、彼らへのいままでの指導について冷静に振り返ってみた。学生の至らなさは、指導者の至らなさ。両者は写し鏡のような関係とよく言われる。

確かに、次のような方法で、いままでは手厚く行えた。しかし、いままでに確立したと思い込んでいた指導法がマンネリに陥っていなかったのかを疑ってかかった。本当に指導の余地はなかったのか。思い込みや油断はなかったか。

- ①事前のオリエンテーションでのシラバス確認
- ②オリエンテーション教材のスライド提示・プリント配布・関大LMSでの講義ページでの内容掲載
- ③模擬授業実施の 2 回前の講義での指導案提示の予告
- ④実施 1 回前の講義までに事前提示の催促と確認
- ⑤実施が迫った直前にメールでの提示には、事前指導はできないことも事前に伝達
- ⑥事前提示があれば、実施 1 回前の講義後に居残り指導か、添削結果を伝達、あるいは返信
- ⑦実施の週に入っても事前未提示の場合、指導案作成の進捗確認メールを送信
- ⑧模擬授業実施当日、指導案・配布資料・板書計画の事前配布を求める
- ⑨実施後、講義での学生相互の意見交換を行う
- ⑩講義後に居残りの振り返りを勧め、コメントと改善点を伝える
- ⑪関大 LMS から個人宛メールで授業記録の動画URLを伝達

そのような視点から捉えると、筆者の指導法にさらなる進化が求められていると感じた。

そこで、改善策として、模擬授業の事後指導として、授業記録の動画URLとともに、コメントと改善方法について、関大 LMS から個人宛メールで送信して十分に指導することに切り替えた。

加えて、約半数近くの学生が模擬授業中に「てにをは」の抑揚が変であった。これは、テレビ等のメディアで目立つようになった言い回しである。入ってくる数少ない情報の影響を受けやすく、公の場での望ましいコミュニケーションのあり方が変化したコロナ後の幼稚な抑揚と判断して、模擬授業で使った学生には事後指導のメールで修正を求めた。

もともと、今回の学習指導要領の改訂では、文面の配列に特徴があり、そのために読み手の読解力が問われる。言い換えると、具体的にどのような授業をするのかがイメージしにくい。新科目なので教材の扱いや展開、評価の方法が、自分の受けた授業経験から推測しにくい。そのために、内容理解の前に文面の配列構造を理解する必要がある。

一般的に、ひとの言動には、その人の価値観やいままでの人生経験が現れてくる。そのため、模擬授業に指導案には、学生がいままでの経験等からもった教師像や授業観、生徒観といったものが現れてくる。

本学に入學できた学生は、教育レベルは全体的に比較的高く、また、いままでに受けた教育の内容や方法は、前回の学習指導要領のものである。しかし、今回の改訂内容が求めるものはそこから変わって進化している。

そこで、この講義では、知識注入型の進め方と合わせて、模擬授業指導案の作成指導で効果的な手法として、ナラティブなアプローチを用いた。理由は、作成に不慣れな学生に寄り添ってやり取りしながら、高校時代に経験した、授業はこうあるべきだというイメージや価値観から学生を解放して、改訂後の学習指導要領が求めるところへと学ぶ過程で、学生自身により良い気づきへ緩やかに導くためである。

指導案作成段階でのやり取りでは、学生に授業内容を説明させながら、講師が口頭での指導に加えて、具体的に文言を添削して指導記録を残すと、学生が振り返って内容を修正し易い。これが口頭指導だけだと、講師の意図が適確に伝わらないことが多い。

模擬授業実施場面では、事後の振り返りにおいて、生徒役の学生からの意見や講師から講評に加えて、授業の様子を記録した動画を学生に視聴させる。そうすることで、学生自身が教師役としての言動を客観視することができ、自分だけの思い込みから解放されやすい。また、指導案を事後に修正して提出させる際には、それらの振り返り内容を記入させ、言語化することで記録と記憶の両面から気づきを学びに深化させることが期待できる。

指導案作成において、これらの課題を突破できるように、対応を企画・実践した。

【突破方法 1】 指導案作成のインストラクションの改善（下に変遷を示す）

1-1 学習指導要領平成 20 年改訂では 4 観点評価と科目 A・B の区分

関西大学教職支援センターの全学共通様式と東京都教育委員会の様式を参考に指導案様式を作成

1-2 学習指導要領平成 30 年改訂に伴う令和 3 年 8 月『指導と評価の一体化』への変化では、3 観点評価と新科目の〇〇総合から〇〇探究へのつながりを丁寧に扱う

1-3 筆者の講義での新たな様式の構築と例示の修正（様式 1 指導案の様式）（様式 2 指導案の書き方）

今回、修正した箇所は、つぎの 3 か所である。

項目 2 の（中）単元の目標として、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史科編』の各教科書の該当箇所から、適した目標を転記させる。

項目 3 の（中）単元の評価として、3 観点評価について、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』の巻末資料から、適切な文言を転記させる。

項目 6 本時の指導と評価の計画(2)に評価のルーブリック(3 観点段階別表)を作成して記入する。

【突破方法 2】 添削の強化

コメントについて、褒める・修正を促す等の内容や順序と構成上のバランス

ナラティブな表現を用いて学生にも伝わる丁寧な表現

分かりやすい例えとして、野球やバスケットボール等、学生が動きを想像できるチームスポーツに例える

学生の気持ちを尊重しながら寄り添い、傷つけないで、しかも、しっかり伝わるような表現に一層進化させる努力と工夫

地理歴史科□学習指導案^{a)}

..... 学校名□□^{a)}
□□□□□□□□□□□□□□ □□^{a)}
□□□□□□□□□□□□□□ □□^{a)}
..... 指導教官^{a)}

□指導日時・教室□□令和□□年□□月□□日(□) □□限目□教室名□□^{a)}
□学年主任・異動□□□□□科□□年(次)生□□人(内訳□□人)^{a)}
□科□目 □□名□□□□□□□□□□ (単位数□□□□)^{a)}
□使用教科書□□□□□□□□□□ (出版社名□□□□)^{a)}

1 □単元(題材)名^{a)}

2 □単元(題材)の目標^{a)}

3 □単元の評価規準^{a)}

□□□□知識・技能 ^{a)}	思考・判断・表現 ^{a)}	主体的に学習に取り組む態度 ^{a)}
a2	a3	a3

4 □指導に当たって^{a)}

(1) 生徒観^{a)}

(2) 教材(題材)観^{a)}

(3) 指導観□□^{a)}

4 □単元(題材)の指導計画(総時数○時間)^{a)}

□□第○次□□□□□□□□□□ (□□□時間)^{a)}
..... 第○次□□□□□□□□□□ (□□□時間)^{a)}
□□第○次□□□□□□□□□□ (□□□時間)^{a)}
..... □ 1時 □□□□□□□□□□□□□□□□□□^{a)}
□□□□ 2時 □□□□□□□□□□□□□□□□□□^{a)}
..... ○時 □□□□□□□□□□□□□□□□□□ 本時^{a)}

5 □本時の指導と評価の計画(第○次□第○時)^{a)}

(1) 本時のねらい^{a)}

(2) 評価のルーブリック(§観点別個別)^{a)}

□□□ 知識・技能 ^{a)}	思考・判断・表現 ^{a)}	主体的に学習に取り組む態度 ^{a)}
A a2 ^{a)}	a3	a3
A a2 ^{a)}	a3	a3
B a2 ^{a)}	a3	a3
C a2 ^{a)}	a3	a3

(3) 準備・資料等□□^{a)}

(4) 本時の展開^{a)}

時間	学 習 内 容 ^{a)}	生徒の学習活動 ^{a)}	教師の指導・留意点 ^{a)}	評 価 規 準 ^{a)} 【観点】(評価方法) ^{a)}
a2	a2	a2 a3	a2 a3	a3

6 □反省^{a)}

7 □ご講評^{a)}

地理学と科学習指導案

学 校 名 _____
 指導者 氏 名 _____
 指導日時・教室 令和 ____ 年 ____ 月 ____ 日 () 曜日 教室名 _____
 対象生・集団 ____ 科 ____ 年 (次) 生 ____ 人 (内訳 ____ 人) (※研修時間140分)
 科目 名 _____ (担任氏名) _____
 使用教科書 _____ (出版社名) _____

1 単元(題材)名 (中項目で示す)
 学習指導要領に示された教科・科目の目標、内容をもとに、あるまとまりをもった教育内容の単位の名称を記述する。
 ●例えば、教科書の「章」や「節」を参考にして記述する。
 地理歴史科 第2章 第1節 日本と世界の関係 (地理歴史科 第2章 第1節 日本と世界の関係) (地理歴史科 第2章 第1節 日本と世界の関係)

2 単元(題材)の目標
 単元(題材)全体を通しての目標を、学習指導要領に基づいて具体的に記述する。
 ●生徒に何を学ばせたいのかを明らかにし、生徒の視点に立つて記述し、目標を絞る。
 単元書で記述する。その際、評価の観点も明示する。

3 単元の評価
 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する考え方を、教科書・教材・評価資料(教科書)に基づいて記述する。
 知識及び技能 思考・判断・表現等 学びに向かう力・人間性等
 上記1の単元名や項目に適切な横線を、意図を記入し、横線を引く。

4 指導に当たって
 (1) 生徒観
 単元(題材)の目標に関連して、既習事項の理解度や習熟度、教材についての興味・関心の程度、学習意欲の有無等を具体的に記述する。
 ●生徒の状況を示す数値等のデータがあれば、できる限り活用する。

(2) 教材観
 取り上げる教材の概要や特徴、教材の系統性、単元(題材)の目標を達成するに当たっての必要性を記述する。
 ●教科書との関連等について触れてもよい。

(3) 指導観
 (1)の生徒が単元(題材)の目標にも効果的に到達できる学習方法を考え、そのために必要な指導方法や指導方針、重点事項等を具体的に記述する。
 ●これまでの指導経過・指導実績を踏まえ、単元(題材)の系統性を押さえて記述する。
 ●指導形態や配慮事項などを具体的に記述する。

5 単元(題材)の指導計画(総時数 ____ 時間) ... 1時間10分の授業の進度は、約4ページ
 第一次 (小項目で示す) (時間) ____ 日までに計画
 第二次 (時間) ____
 第三次 (時間) ____
 第〇次 (時間) ____
 1時 ____
 2時 ____
 〇時 ____
 ... 本時

6 本時の指導と評価の計画 (第 ____ 次 第 ____ 時)
 (1) 本時のねらい
 単元(題材)の目標を踏まえて、生徒に本時でどのような力を付けさせたいのかを明らかにし、生徒の視点から立て、具体的に記述する。
 ●目標に付けさせたい力等については、簡潔な書で記述する。
 ●「評価の観点」に、「～について考察し考えを的確に表現する。」「思考・判断・表現。」「～を理解し、知識を身に付けている。」「知識・技能」など、具体的に記述する。
 (2) 準備・資料等
 (3) 本時の展開

時間	学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	評価の観点 【観点1】(評価方法を)
時間	〇学習活動のまとめ 時間内に、その学習内容を振り返り、学習の振り返りをする。 分 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇学習活動と教師の指導とのつながりを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇評価の観点と評価の方法。 評価方法(評価方法を)を具体的に書く。 (本時のねらいと一致した評価観点と評価方法を)を具体的に書く。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。
目標	単元 目標 ～に到達させる。			【評価の観点、観点の観点】 ～に到達させる。 ～に到達させる。 ～に到達させる。
展開	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇学習活動と教師の指導とのつながりを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇評価の観点と評価の方法。 評価方法(評価方法を)を具体的に書く。 (本時のねらいと一致した評価観点と評価方法を)を具体的に書く。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。
学習内容	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇学習活動と教師の指導とのつながりを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇評価の観点と評価の方法。 評価方法(評価方法を)を具体的に書く。 (本時のねらいと一致した評価観点と評価方法を)を具体的に書く。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。
まとめ	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇生徒が何を目標に、どんな方法で達成しようとしているかを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇学習活動と教師の指導とのつながりを具体的に書く。 ●学習活動の振り返り、学習活動の振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。	〇評価の観点と評価の方法。 評価方法(評価方法を)を具体的に書く。 (本時のねらいと一致した評価観点と評価方法を)を具体的に書く。 ●進め、振り返りをする。 ●進め、振り返りをする。

(注) 学習指導要領はA4判2枚以上となっており、(表裏両面)の学習指導要領は、学習指導案の構成上、必要な要素を示したものである。各学校において一層の工夫・改善が望まれる。

資料添付 授業プリント(1時間10分)
 常用型5/10/15/20/25/30/35/40/45/50/55/60/65/70/75/80/85/90/95/100
 (形式:PDFファイルは不可、スクリーンショット写真等可)

5 模擬授業で見られる学生の課題

指導として個々の困難な場面での経験から改善策を学ばせる。

一般的に、教育学部や教員養成コースの学生の強みは、教育方法論や手法の多様さ。一方、それ以外の一般学部の学生の強みは専門分野の質と量の多様さといわれる。それぞれの強みを伸ばし、弱みを補強する。

5-1 教材研究や立場の認識の不足

高校時代の授業からアップデートできていない

⇒情報不足への気づきと収集方法の獲得、自律できる教師としての立場への意識改革(授業の参加者 User(生徒)から創造者 Maker や司会進行・促進者と評価者(教師)への 180 度転換に気づかせる)。

5-2 ICT 機器接続、プレゼン・スライド、準備不足

用語の基本的なよみがな間違い

用語や人物名の誤写

因果関係の誤解や不十分な把握

生徒の言動への返答

⇒基本の大切さを認識させ、とくに改めて教科書を精読する大切さを学ばせる。

また、基本的には、授業が始まれば、教師ひとりでも乗り越えるようなイメージを事前に反実仮想で準備する。例え ICT 機器を用いたくても、停電や故障では使えないまま授業を行うことになるのは容易に想像がつく。だから、教師役には講義開始前に機器の接続を確認させる。講義では、何度も学生に準備 9 割以上、残りは生徒の突発的な出来事への対応と伝えている。対応できない緊急を要する場合は、ほかの教師に支援を求めるか、時間的に余裕のある内容であれば、次の授業までに調べて答える等の対応策のバリエーションを増やす。

5-3 発声やことば遣い

声のボリュームが小さい

メディアでよく見かける「てにをは」での高低差のある抑揚での聞きづらさ

⇒授業後にコメントするとともに、授業記録の画像を視聴させ、客観視させて、聞きづらいことに気づかせる。オリエンテーションで示したように、腹式呼吸と姿勢を意識させる。

5-4 講師と学生の関係性

誤った思い込み

講師やほかのひとを批判できる力はあるが、自身の言動について反実仮想して事前に改善できない

講師やほかのひとは間違っはいけないが、学生の自分はまだ許される

⇒ひとは不完全で、頑張っても間違う生きもの。講義はじめに、間違いを見つけたら、教え合う姿勢が大切との呼び掛けを行う。講師も新しい発見や気づきには柔軟に対応する。支配・被支配の

服従関係ではなく、大切なのは、講師は現在の課題解決への導きと支援、学生は集中と改善への協力の視点。さらに、指摘を怖がるのではなく、気づかないことを教えてくれたことへ、感謝の気持ちを伝えるのも大切と気づかせる。自分の至らなさを指摘してくれたひとは、攻撃してくる敵ではなく、真剣に向き合って教えてくれた味方と捉える。

さらに、学生が講師に対して行った言動は、ひとたび模擬授業や学校現場になれば、今度は立場が180度変わって、教師役となった学生自身が経験することになる。言い換えれば、両刃の刃。講師や模擬授業でのほかの教師役の学生への言動は、のちに自分に戻って降りかかってくることに気づかせる。

ほかにも、年度末には誤った様式や内容での提出を何度も繰り返す例も複数現れる。同じ誤りを繰り返す学生には、根気強い指導として、提出期限を伝え、誤り箇所の添削を添付して、メールで再提出をお勧めした。

講義の質の維持(担保)に関連して、ときどき3回生の学生から、「来年、教育実習なので通してほしい」という要望が寄せられる。もちろん、事前に改善のお勧めを指導・連絡した上で、講義期間中や提出メ切に間に合う修正は受け付ける。しかし残念ながら、期間を過ぎた無理な願いは、ほかの学生との評価の平等性と公平性の観点から丁重にお断りしている。また、シラバスにも示したように提出されても内容が不十分であれば、それなりに評価する。

提出様式等の約束事や時間管理、提出期限等を守れないことが度々見られる場合や不十分なスキルのままでは、学力を担保できず、将来、学校での教育実習でご迷惑をかけることにつながるからだ。これは筆者が、過去、教育実習担当として度々そういう実習生に現場で遭遇した経験からの判断である。

6 講師自身の進化

つぎつぎに現れる課題へ立ち向かうレジリエンスと具体的改善の創造

ポジティブなマインドセット・ピンチはチャンスと捉える

情報収集のスパイダーウェブ(蜘蛛の巣)

⇒書籍は古い。新しいのは教科書会社からの通信やHPの記事。

人材育成の裾野を広げるポジティブ行動支援

より良い学生の育成と本学からの教員採用試験合格者の増加を通じ、地域の教育力向上へ貢献

7 結果と課題

2018(平成30)年の高等学校学習指導要領の改訂時期において、地理歴史科教育法(二)の講義における指導法について6年間の実践を振り返り、おもに模擬授業指導案の作成に関する課題を抽出し、分析を通じて指導法の改善についての研究をおこなった。

とくに成果として、学習指導要領改訂に伴い、2024(令和6)年度から用いることができる新しい指導案様式と記入の基準を提示することができた。

しかしながら、今後も変化し続ける教育界にあって、課題も残されている。

まず、毎年夏に開催される大阪府教育課程研修会を通じて、マイナーチェンジと次回2028(令和10)年改訂に向け、情報収集を継続する必要がある。

つぎに、高校での社会的包摂について、さらなる変化が加速している。本務校では、2023(令和5)年度から大阪府立高校での通級指導が導入された。

最後に、ICT機器の活用について。2020(令和2)年2月以降、学校現場で緊急対応が迫られ、急速に普及した。と同時に、教員への授業評価として、生徒からの授業アンケート評価に影響が生じた。とくに、高い評価を得られたのは、ICT機器を用いて授業スライドをスクリーンへ投影した円滑な展開であった。また、スライド投影だけでなく、Google Form や QR コード、生成系 AI 等の活用に加えて、つぎにクラウドツールの活用も控えている。

確かに、学生がリズムよく展開に乗って内容を分かったように信じ始めている。しかし、本質的に大切なことは、活用できる学力のために、学びの成果を長期に定着させていることではないだろうか。そこで、実際には定期考査等で、学習内容の長期定着率を測定して、教育調査としてアンケート結果と関連づけて分析する必要がある。

また、2024(令和6)年2月の期末考査において、デジタル採点が試行された。行った感想として、上手に活用すれば、時間の効率化につながる一方で、現段階の答案読み取り能力では数字には比較的強いが、記号や記述回答ではまだ課題が残る。この動きは 2025(令和7)年度の大阪府公立高校での入試で、デジタル採点の本格導入への伏線である。そのため、新年度4月以降には、デジタル採点等の実施に向けた日常的な取り組みが加速することだろう。それに伴い、現場の教員には、その円滑な実施技能の習得も強く求められる。

8 おわりに～母校での講義は私なりの勲章～

今後も講義を続ける限り、つぎつぎに改善すべき課題が生じることだろう。徐々につぎの学習指導要領の改訂時期も迫ってくる。大切なのは、学び続けて進化し続けること。

振り返れば、この 6 年間には、自身の体調や家族の変化等いろいろあった。よく続けられたと、家族や講義関係の方々には感謝したい。今回の執筆にあたっても、締切りの2日前に本務校の勤務中に左手指 2 本に傷を負って、安静のため執筆が思うようにいかなかった。

最も大きな出来事は、昨年度 8 月 29 日に実父が亡くなったことだ。享年 98 歳で大往生であった。父は晩年、生きているだけでも、筆者にとって大きな道しるべであった。

亡父は、1925(大正 14)年生れて、戦時下の 1944(昭和 19)年 9 月に大阪第一師範学校を半年繰上げで卒業し、すぐに訓導として小学生を教えた。教員免許は幼稚園から高校まで取得していた。戦争末期には、3 月 13 日の大阪大空襲で自宅の全焼や、5 月に徴兵後の海軍では呉の大空襲で実戦も経験し、最後は島根県の浜田連綴(れんてつ)基地で終戦をむかえた。

復員後、9 月から小学校に復職。希望して編入した新制の私立大学の心理学科卒業前に、ある短大の教員に勧誘されたが、当時の情勢では短大はすぐになくなるとの噂があり、将来が不安定だと思われて話を受けなかった。その後、小学校教員を続け、校長職で定年退職。再就職で私立中学校の生徒募集室を経て、私立短大付属高校の非常勤講師を 70 歳まで勤めた。趣味として、カメラ撮影や、府の山岳連盟の活動に参加した。最後には、生前叙勲で瑞宝双光章の勲章を天皇陛下から、死亡叙位で正六位の位を内閣総理大臣から賜った。実家には、戦中の教育実習での指導案や新制大学での卒業論文を含め、小学校での卒業アルバム、周年記念冊子、文部省への特別活動研究表彰の応募書類、教育活動の履歴や実績報告書等がいまも大切に保管されている。

父には、1935(昭和 10)年生れの弟がいる。筆者が高校教師をめざしたのは、彼の影響が大きい。彼は戦時中、サイパン島陥落後に、西宮市に縁故疎開を経験した。終戦後、働きながら私立大学の修士課程を修了。府立高校の社会科教員に就き、校長職で定年退職後、短大教授となった。89 歳の現在も、地域史の社会人講師を担っている。彼もまた、兄のように教育貢献から、相応の勲章をいただくことだろう。

筆者にとって、彼らは奇跡の兄弟だと感嘆する。

ひるがえって、1961(昭和 36)年生れの筆者は、大阪市内の高校で 40 年間、おもに歴史を教え、大学院の教職修士課程を 3 年前に修了したが、勲章をいただくようなレベルには至らない。

しかし、私なりの勲章が 6 年前から見つかった。それは、卒業した母校の教員養成課程で講義を通じて後輩を育てることである。講義前には毎回わくわくする。様々な場面で課題や困難さを抱えた学生たちが、ひたむきに取り組み、成長する姿に出会うと、本当に嬉しいし、楽しい。

最後に、感謝のことばを述べさせていただきたい。実務家教員として折り返しのこの時期に、教職支援センターの関係者の皆様には振り返りの機会を与えていただき、本当にありがとうございました。次回、学習指導要領の改訂が予定される年に筆者は 70 歳を迎える。それまで、あと 8 年間、微力を尽くしたい。何が起きるか楽しみでもあります。

9 参考文献

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史科編』平成 30 年告示

国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校地理歴史科』令和3年8月

子どもの心と生きる力を育てるサイト・クラビノ「学習指導要領の歴史!改訂による教育の移り変わりを時代背景とともに解説!」<https://clabino.jp/articles/0045>, 2024 年 2 月 13 日